

コロナ禍におけるマスク着用に対する認識・行動および 影響要因に関する研究

SHEN YUAN

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、21世紀初頭に世界的なパンデミックとして位置づけられた重要な公衆衛生危機であり、2019年末に中国湖北省武漢市で初めて発生して以来、迅速に世界各地に広がっていった。COVID-19の症状は軽度から重度までさまざまであり、発熱、咳、喉の痛み、呼吸困難、疲労などが含まれる。高齢者や基礎疾患を持つ人々にとっては特に深刻であり、致死的な場合もある。発生以来数年間にわたり、COVID-19は多くの人々の健康に甚大な脅威を与え、何百万人もの感染者を出し、多くの命を奪った。さらに、医療施設は過負荷状態に陥り、医療従事者は苦しい労働を強いられた。

一方、感染の拡散を防ぐために、世界中でさまざまな対策が講じられており、具体的には、社会的距離の確保、マスクの着用、旅行制限、ビジネスおよび社会活動の制限、ワクチン接種、封鎖などが含まれる。その中で、マスクの着用は、科学的根拠がある上に、他の対策と比較し、日常生活や生産活動に対する影響が比較的小さく、流行の制御において重要な手段の一つとされている。実際、新型コロナウイルスの感染が広がるにつれて、マスクの着用は一般的な感染予防策となった。

しかしながら、感染症の確定診断件数と死亡者数が急増する中で、マスク着用の効果は、大部分の人が着用する場合のみ実現できるものであり、しかも、いわゆる普及型のマスク着用であることも指摘されている。これは、シンガポール、韓国、中国など一部の国はこの目標を達成しているものの、西洋諸国では広範なマスク着用の促進は大きな障害に直面していると言われている。これらの差異は、文化、政策、情報伝達などの様々な要因によるものと考えられる。

本研究で対象とする中国では、厳格な「ゼロコロナ政策」が施行され、PCR検査やマスク着用など厳しい対策が施行され、新型コロナウイルスの流行期間には、ほぼ全員が外出時にマスクを着用していた。ただし、2022年12月に中国全土で厳格な「ゼロコロナ」政策が大幅緩和されることになり、人々のマスク着用にも変化が見られた。

そこで本研究では、中国における新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行期間中において、人々がマスク着用に対する行動、認識、および影響要因について検討し、特に「ゼロコロナ」政策転換前後の変化についても考慮しながら、文化的社会的背景も踏まえつつ検討することを目的とした。政策転換前後に行った大規模アンケートでは、コロナパンデミック中にマスクを着用したかどうか、マスクの着用頻度、マスクを着用する理由などを調査し、また政策転換の前後における変化等の比較検討も行った。その上で、その時期に中国の在住経験のある人たちへのインタビュー調査も補完しつつ、アンケート調査で明確にしにくかったいくつかの変数について掘り下げて調査した。さらに、脈波実験を通じ、異なるマスク着用状況下での個体の生理学的反応を調査し、データ処理によりマスク着用が心理的に及ぼす影響を定量化し、マスク着用が人々の生理心理にどのような影響を与えるかを探究した。

具体的には、2回のアンケート調査の結果、特に回帰分析の結果と相関係数の計算結果に基づくと、マスク着用行動に関する重要な要因は「認識」、「周辺状況」、「有効性」、「習慣」、「集団心

理」、「活動影響」と「生理影響」であることが分かった。その内、「認識」、「周辺状況」、「有効性」と「習慣」はマスク着用行動に促進する要因である。すなわち、人々がマスク着用に対する認識が深まったり、あるいは周辺マスクを着用している人が多くなったりすれば、マスクを着用する傾向が高まる。特に強制力のある政策がない場合、個人の認識がますます重要になると考えている。一方、「活動影響」は、マスク着用行動に阻害する要因であり、「生理影響」にも関係することが明らかとなった。

また、インタビュー調査の結果や、脈波の実験結果を統合し、さらに先行研究の内容を含めて、説明すべき点が2つある。まず、政府は、コロナの現状に基づいてマスク着用に関する規制を含み様々な政策・制度を制定しているが、規制と政策・制度を守る人々の意識と結合し、一つの認知要素を形成できると考えた。一方で、人々が疫病の状況と自分自身の知識・経験と合わせて、もう一つの認知要素を形成することも考えられる。この2つの認知要素が、「認知」要因を構成しており、本研究において行動に最も影響を与える要因ともなっている。

ただし、留意しなければならないのは中国においては、マスク着用に関する規則とコロナ状況の関係は特異性を帯びている点である。コロナ感染の状況が改善されることで、通常はマスク政策が緩和されるのであるが、中国では「ゼロコロナ」政策が急激に緩和されたタイミングでコロナ感染の状況が急激に悪化することという特殊な事例であるからである。その背景には、厳しい政策・制度及び実行状況が人々の生活や生産活動に深刻な影響を与え、また政府は民衆の不満を緩和するために、コロナ対策を大きく調整したことがある。

一方、マスク着用の行動と活動、心理・生理状態との関係はより複雑であると考えられる。マスク着用の行動は生理に影響を与え、またこの生理状態の変化は様々な活動と繋がっている。例えば、運動の場合でも、普通に仕事・勉強の場合でも、マスクを着用すると、気分が悪くなること、効率が低下することも発生する可能性がある。これらのマイナスの影響は、マスクの着用傾向を低下させることも明らかとなった。また、マスク着用の影響に対し、着用時間、活動種類と関係が深く、しかもかなりの個人差が存在していると考えられる。

本研究の結果を総合し、異なる年齢、性別、文化程度などの要因がマスクの着用行動に与える影響があるかどうか注目したところ、群体間の差異を包括的に理解することができた。結論として、マスク着用の行動、マスク着用に対する認識、および影響要因の関係性を示す独自のモデルを提案することができた。このモデルは、コロナウイルス感染の現状、マスク着用に関する規制、重要性と認知、行動の関係について説明できると同時に、個人レベルの状況である、より複雑なマスク着用の行動と活動、心理・生理状態との関係性も説明することができる。

従って、本研究の発展的意義は、新型コロナウイルスの流行期間中のマスク着用に対する研究は、科学的根拠を提供し、感染症の防止対策を改善し、公衆の健康を促進し、社会的恐れを軽減するとともに、関連政策への提言を行い、流行病の脅威に対処への助力が期待できるものである。(環境行動学)